

親子の読書

第20回日本絵本賞 決まる

自閉症児の輝き描く

第20回日本絵本賞(主催・公益社団法人全国学校図書館協議会、毎日新聞社、特別協賛・山田養蜂場、協賛・図書印刷、旭洋紙バルブ)の大賞に、「ふしぎなともだち」(たじまゆきひこ・作、くもん出版)が選ばれたほか、読者賞(山田養蜂場賞)など各賞も決まった。受賞者の喜びの声や、選考委員の講評を紹介する。

大賞「ふしぎなともだち」

たじまゆきひこさん



たじま ゆきひこ 1940年堺市で生まれ、幼少期を高知県で過ごす。絵本作家の田島征三さんとは双子の兄弟。京都市立美術大学染色図案科卒業。主な絵本に「祇園祭」「じごくのそうべえ」「てっぽうをもったキジムナー」(いずれも童心社)、「ふたりはふたご」(田島征三・共作、くもん出版)など多数。

絵本作家として長く活躍してきた、たじまゆきひこさん(76)は、初の日本絵本賞大賞受賞に「40年近く絵本を作ってきた、こんなに喜ばれた作品は初めて。自閉症の子を持つ家族の力になれたら、何よりもうれしい」と話す。

京都府から兵庫県の淡路島に転居して14年。明るい海を見渡せる暮らしに、「美しい風景に毎日感動している」という。心を揺さぶったのは、風景だけでなく、島に住む元小学校校長で、以前からたじまさんの絵本に共感していた小南広之さん(69)が語った青年たちにも、大きく心を動かされた。小南さんは現役時代、障がい児を隔てない教育を推進。淡路島ではこの試みが結果としていた。たじまさんを訪ね、障がいがあるながらも地域で学び働く島の若者たちを熱く語ったという。そして、自閉症で意思疎通が難しいものの、作業



イラスト・とよた かずひこ

所で配達の仕事をする治井一馬さん(30)を紹介した。たじまさんは、自閉症について知識を深めようと図書館に通った。自閉症児を育てる母の著書を繰り返し読み、「体の中に自閉症児が入った」と感じるまでになった。そして、治井さんに気づかれないよう後を追いつつ、働く姿を見つめ続けた。だが、着想から数年がたち、準備はすっかり整ったものの描き出せなかった。「自閉症の啓発ではなく、淡路島の風景とともに感動できる作品にしたい」。強い思いが、筆を止めていた。

踏み出すきっかけは、治井さんと幼い時から一緒に読んだ小田陽介さん(30)が訪ねて来たことだ。治井さんの絵本ができるといううわ

さが先行し、「このまま描きながら島を去るしかない」とまで思い詰めていた時だった。

2人に着想を得てから、絵本作りは順調に進んだ。力強い線と鮮やかな色の型染めで、島の美しい風景と少年から青年へと成長する主人公をいきいきと描いていく。友人達と「訴えた」。

「自閉症児であっても、主人公のように明るい青年に育つ」。思い悩んでいた手を上げあいさつする。治井さんには、多くの母らが、絵本を手にし笑顔になった。その輝き

は、大賞にまさる喜びになっている。

★もったいないばあさん原画展「もったいないばあさん日記」を連載中の真珠まりさんが、4月9日からフックハウス神保町(東京都千代田区)で絵本「もったいないばあさん」10周年記念原画展を開く。もったいないばあさんの10年間の軌跡が楽しめるほか、キャラクターグッズやお話会も。ワールドレポート展も同時開催。5月11日まで(水曜日休み。詳細は真珠さんのホームページ(www.inarikoshinju.com))。



たくさんの活字を見る受賞者たち印刷博物館で

印刷博物館を見学 読書感想画コン受賞者

京都千代田区で行われた。全国各地から集まった受賞者とその家族の希望者約35人は表彰式後、同文京区の印刷博物館を訪れた。

受賞者は「印刷工房」で活字や古い印刷機の説明を受けた。一つ一つ活字を拾う「文選」という過程を見学中、山形県南陽市立沖郷小学校4年の猪野陽太君(小学校教育の部優秀賞)は、担当者に「君の名前は？」と聞かれた。担当者があつという間にその文字を探し出した。「早く、すく」と猪野君は驚いていた。

印刷博物館は10~18時(月曜休館)。入場料は一般300円、小学生200円、中学生100円、小学生以下無料。問い合わせは03-5884-0230。

あかはね・じゅんこ 1958年東京生まれ。子育て中に作品を書き始め、38歳でデビュー。「がむしや落語」(福音館書店)で、産経児童出版文化賞ニッポン放送賞。

もったいないばあさん日記

竹



みんなで竹林のおじいさんの新遊楽...。おじいさんは竹を使っ...

読者(山)

サ・健太 大福 育むる人。ますますの活躍が期待される。

ふじ

転く時や... 込で... 心が... など